有機薄膜太陽電池への適用を指向したハイパーブランチ

ポリマー光アップコンバージョン色素系の研究開発

谷口 竜也*、小西 秀和**、長村 利彦***、山根 大和

Research and Development of Hyperbranched Polymer Photon Upconversion Dyes Systems for the

Application of Thin Film Organic Photovoltaic Cells

Tatsuya TANIGUCHI, Hidekazu KONISHI, Toshihiko NAGAMURA, and Hirokazu YAMANE

Abstract

Photon upconversion (UC) is a technique to convert long wavelength light into short wavelength light. UC fluorescence by triplet-triplet annihilation (TTA) follows a mechanism involving two molecules of sensitizer and emitter dye materials. We can use long wavelength light as excitation light if a far-red light of wavelength 800-2,500nm can be converted into visible light in this UC dyes system efficiently, and can utilize the energy of the light of the sun spectrum part which is lost without being able to collect until now to a solar battery or photomedical care as optical elements. In this study, for the purpose of high efficiency of the thin film organic photovoltaic cells (OPVs), it was examined that hyperbranched polymers that were introduced sensitizer and emitter and start agent (initiator) have been polymerized in order to concentrate and fix UC dyes and make a solid film in substitution for solution.

Keywords : Photon upconversion, Hyperbranched polymer, Triplet-triplet annihilation (TTA), Dyes system

1. 緒言

アップコンバージョン(UC)とは長波長光を短波長光に 変換する技術である。UC 蛍光は、長波長の光を吸収し三 重項を生成する増感剤(Sensitizer)と増感剤から三重項間 エネルギー移動(triplet-triplet energy transfer; TTET)で励 起三重項を生じ、さらにその励起三重項間衝突(消滅: triplet-triplet annihilation; TTA)によって励起一重項を生成 して蛍光を発する発光体(Emitter)を役割分担させた 2 種 類の色素を組み合わせている。もし、この UC 色素系で 波長 800~2,500nmの近赤外光を可視光に効率よく変換す ることができれば、これまで回収できず損失していた太 陽光スペクトル部分のエネルギーを利用して太陽電池や 光医療等へ応用することができる。

本研究では、有機薄膜太陽電池の高効率化を目的として、SensitizerとEmitterと開始剤(Initiator)を導入した多分



Fig. 1 Schematic illustration of (a) hyperbranched copolymer containing sensitizer and emitter dyes, (b) [hyperbranched polymer containing sensitizer dyes/emitter dyes], and (c) [sensitizer dyes/hyperbranched polymer containing emitter dyes] photon UC dyes systems.

岐高分子(ハイパーブランチポリマー)の重合を行い、光 UC 色素を濃縮・固定化し固体膜化することを検討した (Fig.1)。

2. 実験

2.1 Sensitizer 及び Emitter のハイパーブランチポリ マーの重合

既報¹⁻⁴⁾を参考にして Sensitizer と Emitter と Initiator を 導入したハイパーブランチポリマーを重合した。Scheme 1は Sensitizer 及び Emitter 各々を導入したハイパーブラン チポリマーの合成スキームである。合成したポルフィリ ン誘導体のパラジウム錯体合成色素である Sensitizer モノ マー Palladium(II)Protoporphyrin IX (Pd(II)PPIX) 10mg (1.5×10⁻⁵mol)にベンゼン(脱水)1.50ml を加えて Pd(II)PPIX 0.01M 溶液を調製した。その溶液に開始剤 Dimethyl 2,2'-azobisisobutyrate (MAIB) 0.0172g(7.5×10⁻⁵mol)又は 0.172g(7.5×10⁻⁴mol)を加えて Pd(II)PPIX/MAIB との mol 比



Scheme. 1 Synthetic routes of (a) hyperbranched polymer containing sensitizer dyes and (b) hyperbranched polymer containing emitter dyes.

^{*}専攻科2年 現 ソーラーフロンティア株式会社 **旭有機材株式会社

^{***}特命教授

を 1/5 及び 1/50 とし、353K で 4h 還流してラジカル重合 させ、Sensitizer ハイパーブランチポリマーを重合した。 また、同様にアントラセン誘導体色素である Emitter モノ マ ー BIOC-ANT-AE (BAA) を 使 用 し て BIOC-ANT-AE/MAIB の mol 比を 50/5 及び 50/50 とし、 BIOC-ANT-AE 0.362g (7.5×10^{-4} mol) と MAIB 0.0172g(7.5×10^{-5} mol)又は 0.172g(7.5×10^{-4} mol)にベンゼン (脱水)1.50ml 溶液中で上記と同じ条件で還流することで ラジカル重合を行い、Emitter ハイパーブランチポリマー を重合した。

2.2 (Sensitizer ハイパーブランチポリマー/Emitter モ ノマー)及び(Sensitizer モノマー/Emitter ハイパーブラ ンチポリマー)光 UC 色素系混合溶液の光学特性評価

石英セルに Sensitizer ハイパーブランチポリマーと Emitter モノマーを混合した [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol] 及 び [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol]光 UC 色素系と Sensitizer モノマーと Emitter ハイパーブランチポリマー混合した [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/5mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol] 及 てド [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/50mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol]光 UC 色素系を各々色素成分濃度比 1/50mol/molのアニソール溶液を調製し、窒素バブリング による脱溶存酸素処理後に紫外-可視(UV-Vis)吸収スペク トル測定及び蛍光スペクトル測定を行った。

2.3 (Sensitizer ハイパーブランチポリマー/Emitter モ ノマー)及び(Sensitizer モノマー/Emitter ハイパーブラ ンチポリマー)光 UC 色素系フィルムの作製

Sensitizer ハイパーブランチポリマーと Emitter モノマ を 混 合 した [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol] 及 び [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol]光 UC 色素系と Sensitizer モノマーと Emitter ハイパーブランチポリマー混合した [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/5mol/mol), 及 0.05/2.5mmol/mmol] てド [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/50mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol]光 UC 色素系を各々色素成分濃度比 1/50mol/mol として THF 中に溶解させ洗浄したスライド ガラス上に溶媒キャスト法によってフィルムを作製した。

2.4 (Sensitizer ハイパーブランチポリマー/Emitter モ ノマー)及び(Sensitizer モノマー/Emitter ハイパーブラ ンチポリマー)光 UC 色素系フィルムの光学特性評価

2.3 で作製した各々の光 UC 色素系フィルムの紫外-可 視(UV-Vis)吸収スペクトル測定を拡散反射法で行った。 また、大気雰囲気下において蛍光スペクトル測定及び励 起光スペクトル測定を行った。

3. 結果及び考察

3.1 (Sensitizer ハイパーブランチポリマー/Emitter モ



Fig.2 UV-Vis absorption spectra of(1)[(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05mmol/2.5mmol], (2) [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05mmol/2.5mmol], (3)[Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/5mol/mol), 0.05mmol/2.5mmol], and (4)[Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/50mol/mol), 0.05mmol/2.5mmol] photon UC dyes systems in anisole after removing dissolved oxygen by the nitrogen bubbling, respectively.



Fig.3 Fluorescence (1)spectra of [(Pd(II)PPIX/MAIB,1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05mmol/2.5mmol], (2)[(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05mmol/2.5mmol], (3)[Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/5mol/mol). 0.05mmol/2.5mmol], and (4)[Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/50mol/mol), 0.05mmol/2.5mmol] photon UC dyes systems in anisole under excitation at $\lambda_{ex} = 514$ nm after removing dissolved oxygen by the nitrogen bubbling, respectively.

ノマー)及び(Sensitizer モノマー/Emitter ハイパーブラ ンチポリマー)光 UC 色素系混合溶液の光学特性評価 Fig.2 及び Fig.3 は各々(Sensitizer ハイパーブランチポリ マー/Emitter モノマー)光 UC 色素系[(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol](曲線 1)、 [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol] (曲線 2)、(Sensitizer モノマー/Emitter ハイパーブランチポリマー)光 UC 色素系 [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/5mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol] (曲 線 3) [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/50mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol] (曲線 4) の各々 Sensitizer 色素と Emitter 色素の濃度比 1/50mol/mol のアニソール溶液の窒 素バブリングによる溶存酸素除去処理後の紫外-可視 (UV-Vis)吸収スペクトル測定及び励起波長 $\lambda_{exc} = 514nm$ の蛍光スペクトル測定の結果である。

Fig.2 の UV-Vis 吸収スペクトル測定結果から、Sensitizer 色素 Pd(II)PPIX の Q バンドに起因する吸収波長領域 λ = 500nm~600nm において吸収ピーク λ = 514nm, 547nm, 565nm の 3 つが確認された。一方、Emitter 色素 BIOC-ANT-AE に起因する吸収波長領域 λ = 300nm~400nm において吸収波長ピーク λ = 360nm, 379nm, 400nm が確認された。重合前後では Sensitizer 及 び Emitter 共に吸収ピークのシフトは確認されなかった。 各吸収ピークの吸光度においてもEmitter に起因するピー ク及び Sensitizer に起因するピーク共にあまり変化が認め られなかった。また、ハイパーブランチポリマー内の開 始剤 MAIB 含有量が少ない場合、吸光度が大きいことが 確認された。

Fig.3 の励起波長 λ_{exc} = 514nm の蛍光スペクトル測定 結果から、全ての色素系において波長域 λ = 420nm~ 500nm での光 UC 蛍光を確認した。また、λ = 552m, 574nm, 593nm において Sensitizer に起因する蛍光が、λ = 665nm において燐光が観測された。光 UC 蛍光強度は [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.m5mol/mmol] (曲 線 2) [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/5mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol](曲線3)光UC色素系が大きく、 [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE, (0.05/2.5mmol/mmol] 曲 線 1) [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/50mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol](曲線4)光 UC 色素系が小さいこ とが確認された。また、モノマー同士の (Pd(II)PPIX/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol) 光 UC 色素系と比較して、全ての光 UC 色素系の光 UC 蛍 光強度は低いことが確認された。Sensitizer ハイパーブ ランチポリマー含有の色素系では、溶液中の MAIB ユ ニット数が多い場合に光 UC 蛍光強度が大きくなると 考えられる。これは MAIB ユニット数が多い場合に高 分子主鎖の運動性が高いため TTET が起こる確率が高 くなるためだと考えられる。一方、Emitter ハイパーブ ランチポリマー含有の色素系では、色素モノマーユニ ット数が多く拡散性が高い程、高効率の TTET 及び TTA を行うことができると考えられる。

3.2 (Sensitizer ハイパーブランチポリマー/Emitter モ ノマー)及び(Sensitizer モノマー/Emitter ハイパーブラ ンチポリマー)光 UC 色素系フィルムの光学特性評価

Fig.4 及び Fig.5 は Sensitizer ハイパーブランチポリマー と Emitter モノマーを混合した [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol](曲線1)



Fig.4	UV-Vis	absorption	spectra	of	(1)			
[(Pd(II)PPIX/MAIB,1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE,								
0.05mmol/2.	5mmol],				(2)			
[(Pd(II)PPIX/MAIB,1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE,								
0.05mmol/2.	5mmol],				(3)			
[Pd(II)PPIX/	(BIOC-AN	T-AE/MAIB,50	/5mol/mol)),				
0.05mmol/2.	5mmol],	a	nd		(4)			
[Pd(II)PPIX/	(BIOC-AN	T-AE/MAIB 50	/50mol/mo	n.				

0.05mmol/2.5mmol] photon UC dyes systems cast films in air.



Fig.5	Fluorescen	ce spe	ctra	of	(1)		
[(Pd(II)PPIX/MAIB,1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE,							
0.05mmol/2.3	5mmol],				(2)		
[(Pd(II)PPIX/MAIB,1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE,							
0.05mmol/2.3	5mmol],				(3)		
[Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB,50/5mol/mol),							
0.05mmol/2.3	5mmol],	an	d		(4)		
[Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB,50/50mol/mol),							
0.05mmol/2.3	5mmol] photon	UC dyes	systems	cast	films		
under excitation at λ_{ex} = 517nm, 517nm, 516nm, and 515nm							
in air, respec	tively.						

及び [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol](曲線 2)光 UC 色素系と Sensitizer モノマーと Emitter ハイパーブランチポリマー混合した [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/5mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol](曲線 3)及び [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/50mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol](曲線4)光UC色素系を各々色素成 分濃度比1/50mol/molとしてTHF中に溶解させ洗浄した スライドガラス上に溶媒キャスト法によって作製したフ ィルムの紫外-可視(UV-Vis)吸収スペクトル測定を拡散反 射法で測定した結果及び大気雰囲気下励起波長λ_{exc} = 515nm, 516nm, 517nm での蛍光スペクトル測定の結果で ある。

Fig.4 の測定結果から各光 UC 色素系において吸光度に 相異が認められるのは溶液系を調製した場合と同濃度に よって溶媒キャスト法で固体膜を作製したため、膜厚が 不均一となり、吸光度に相異が生じた要因だと考えられ る。また、開始剤の含有量差による製膜後の膜厚差によ ると考えられる。開始剤含有量が多いポリマーを使用し た光 UC 色素系では溶液の粘性が増大し、より均一で製 膜性が良好な固体膜が作製された。

Fig.5の測定結果から Fig.2の溶液系の UV-Vis 吸収スペ クトル測定の結果と比較して発光強度の傾向が同じ結果 となった。全ての光 UC 色素系において、励起波長であ る λ_{exc} = 515nm, 516nm, 517nm 前後にピークを示した。し かし、これはフィルム系にしたことで色素系の原子分子 の密度が高くなり、エキシマを形成したためであること が考えられる。また、 [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/50mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 0.05/2.5mmol/mmol](曲線 2) [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/5mol/mol), と 0.05/2.5mmol/mmol](曲線3)光UC色素系の場合、Emitter モノマーBAA の蛍光波長領域 400~500nm において発光 が観測され大気雰囲気下での光 UC 蛍光の可能性が示唆 された。これは固体膜による色素の固定・濃縮により大 気中の酸素の影響が軽減されたためだと考えられる。他 方 、 [(Pd(II)PPIX/MAIB, 1/5mol/mol)/BIOC-ANT-AE, 曲 線 F 0.05/2.5mmol/mmol] (1) [Pd(II)PPIX/(BIOC-ANT-AE/MAIB, 50/50mol/mol), 0.05/2.5mmol/mmol](曲線4)光UC色素系においてはBAA の蛍光である有意な光 UC は確認できなかった。この原 因としては、今回の調製法による光 UC 色素系のフィル ム化では色素が強く拘束されてしまうため、色素分子間 の衝突によるエネルギー伝達が生じず、結果として光 UC が起こらなかったのだと考えられた。したがって、今後 は色素分子の運動性を保持した状態でフィルム化する新 しい方法を検討する必要がある。

4. 結言

ポルフィリン誘導体とアントラセン誘導体の混合色素 系(Pd(II)PPIX/BIOC-ANT-AE)光 UC 色素系において、緑 色の励起光を青色の光UC蛍光に変換する光UC色素系を 検討した^{5,6)}。この Pd(II)PPIX 及び BIOC-ANT-AE を重合 しハイパーブランチポリマーを合成した。また、このハ イパーブランチポリマーとモノマーの光 UC 色素系の溶 液系及びフィルム系において光学特性評価を行い、溶液 系において光 UC 蛍光を確認し、その発光強度はハイパ ーブランチポリマー組成に依存すること、及びモノマー 同士の系の光 UC 蛍光強度に及ばないことが確認された。 また、フィルム系においてはエキシマ形成が考えられ、 大気雰囲気下での有意な光 UC は確認できなかった。ま た、今回検討した光 UC 色素系はすでに有機薄膜太陽電 池がエネルギー変換可能な波長領域の変換となるため、 近赤外光を紫外・可視光に変換可能な光 UC 色素系をハ イパーブランチポリマー化し、濃縮・固定することによ って固体膜化することが課題としてある。これらの課題 を克服することにより、有機薄膜太陽電池への導入が可 能となり変換効率の更なる改善が期待される。

参考文献

- Tsuneyuki Sato, Nobuyuki Sato, Makiko Seno, Tomohiro Hirano, "Initiator-Fragment Incorporation Radical Polymerization of Divinylbenzene in the Presence of Glyoxylic Oxime Ether: Formation of Soluble Hyperbranched Polymer", Journal of Polymer Science: Part A: Polymer Chemistry, Vol. 41, 3038–3047 (2003).
- Tsuneyuki Sato, Masahiko Hashimoto, Makiko Seno, Tomohiro Hirano, "Soluble hyperbranched polymer through initiator-fragment incorporation radical copolymerization of ethylene glycol dimethacrylate and α-ethyl β-N-(α'-methylbenzyl) itaconamate in benzene", *European Polymer Journal*, 40, 273–282(2004).
- Tsuneyuki Sato, Yukiko Arima, Makiko Seno, and Tomohiro Hirano, "Initiator-Fragment Incorporation Radical Polymerization of Divinyl Adipate with Dimethyl 2,2¢-Azobis(isobutyrate): Kinetics and Formation of Soluble Hyperbranched Polymer", *Macromolecules*, 38, 1627-1632(2005).
- 4) Tsuneyuki Sato, Hiroki Nobutane, Tomohiro Hirano, Makiko Seno, "Hyperbranched Acrylate Copolymer via Initiator-Fragment Incorporation Radical Copolymerization of Divinylbenzene and Ethyl Acrylate: Synthesis, Characterization, Hydrolysis, Dye-Solubilization, Ag Particle-Stabilization, and Porous Film Formation", Macromol. Mater. Eng., 291, 162–172(2006).
- 5) 谷口竜也、河原麻世、山崎康寛、長村利彦、山根大和、" フタロシアニン誘導体色素を用いた光アップコンバ ージョン色素系の研究開発"、第52 回化学関連支部 合同九州大会(北九州国際会議場、2015 6/28、2015) P-89.
- 6) 谷口竜也、河原麻世、山崎康寛、長村利彦、山根大和、 い新規フタロシアニン誘導体色素を用いた光アップ コンバージョン色素系"、2015 年光化学討論会 (大 阪市立大学杉本キャンパス 全学共通教育棟および 基礎教育実験棟、2015 9/9) 1P060.

(2018年11月5日 受理)